

2024 年度名古屋造形大学
視覚表現領域 総合型選抜・専願 課題文

< 物語の文章 >

作品名：月の子たち CHILDREN OF THE MOON

著者名：リチャード・バラム・ミドルトン Richard Barham Middleton

訳：hiro

男の子は公園の木々が途切れた場所に立っていました。その先にはなめらかな芝生が、坂のふもとの大きなお屋敷まで、すべり込むように緩やかに広がっていました。

男の子が着ているのは、ニッカーボッカー^{*1}と大きく裂けてボタンがとれたシャツだけでした。そのため男の子のはだけた足と首と胸は、月の光を受けて銀色に輝いていました。

昼間は、男の子の髪の毛はぼさぼさでもじゃもじゃの金髪でしたが、今は頭上にぼんやりと浮かぶ黒雲のようでした。それに比べて顔はひどく白く、まるで死んでいるようでした。

男の子は露に濡れて輝く薔薇と百合の大きな花束を腕の中に抱えていました。

それらは公園の花壇から盗んだもので、その冷たい花びらが男の子の頬を叩き、痛いほどの香りが鼻孔を満たしていました。

暗がりの中で薔薇のとげが両腕をあちこち引っかき、男の子はひどい痛みをかんじました。けれどもこの鋭い痛みのお慰めは、男の子を外套のように包み込んでいる夜の不思議をいっそう深める役にしか立ちませんでした。

男の子の背後の黒い木々は夢を見、頭上の空の無数の星たちはふるふると震えたり震え止んだりしていました。

けれどもそんなことは、男の子にとってどうでもいいことでした。なぜなら、膝丈ほどに伸びた芝生のはるか向こうの、霧の織物に包まれたぼんやりした輝きは、男の子の熱心に見つめる目に妖精の豪華な宮殿と映っていたからです。

赤や、オレンジや、黄金色の妖精の明かりが百もの窓から楽しげに漏れているのを見て、男の子は驚きでいっぱいになりました。眠りの中で長い間求め続けてきた宝石のきらめきを、ぱっちりと目覚めている目で見ることもあるなんて。

男の子はただただ見つめていました。そのうちにみはり過ぎて目に涙がたまり、闇の中で魔法の光が踊り出しました。夜の鳥の鳴き声も、ウサギが草むらを素早く走り抜ける音も、遠くから途切れとぎれに流れてくる音楽の旋律も、男の子の耳にはもう届いていませんでした。

男の子の腕の中の花々はその音楽につれて揺れ、男の子の胸は夜の深い鼓動につれて波打っているかのようでした。

男の子はあんまりうっとりしていたので、女の子がやって来たことに気がつきませんでした。女の子はすぐそばまで来て男の子をじっくりと眺め、それから月明かりの中で優しく呼びかけました。

「ねえ！ あなた！」

その声に男の子はくるりと振り返り、驚いた目で女の子を眺めました。見ると、女の子は白いドレスを着て、小さな顔を興奮させていました。

「きみは妖精なの？」

そう尋ねた男の子の声は、夜の霧のせいでかすれたように聞こえました。

「ちがうわ。」女の子は言いました。「わたしは女の子よ。あなたは森の子ね？」

男の子は口をつぐんだまま、困り果てて女の子を眺めました。こんなにもいきなり夜の闇から飛び出してきた、ちっちゃくって白くって優しい声をしたこれは、なんなのかしら？

「実をいうとね、」女の子は言いました。「わたしは妖精を探しにきたのよ。森の中に妖精の輪があったの。よろしければ一緒に行きましょうよ、森の子さん。」

男の子は黙ってうなずきました。女の子としゃべるのがこわかったのです。そして、胸に花束を抱きしめたまま、女の子に寄り添って森の中を歩き出しました。「わたしが来たとき、あなた何を見ていたの？」女の子が尋ねました。

「宮殿——妖精の宮殿。」男の子はもごもごと言いました。

「宮殿ですって？」女の子は言いました。「あら、宮殿なんかじゃないわよ。わたし、あそこに住んでいるのよ。」男の子はあらためて畏敬の念で女の子を眺めました。この子が妖精だったらどうしよう……。けれども、女の子はかたわらを歩く男の子が靴音を立てないことに気づいてしまいました。

「足の裏は痛くないの？ 森の子さん。」

女の子は尋ねましたが、男の子は何も答えませんでした。それから二人はしばらく黙り込みました。女の子は歩きながら辺りを熱心に見回し、男の子はそんな彼女の顔を眺めました。

間もなく二人は広い溜め池にたどり着きました。

そこでは噴水が小さな音を立て、物陰にかくれた魚にあぶくを投げかけていました。

「あなた泳げる？」女の子は男の子に尋ねました。男の子はかぶりを振りました。「それは残念。」女の子は言いました。「水浴びして遊べるのに。暗いときのほうがずうっと楽しいのよ、ここはちょっと深いけれどね。妖精の輪のところへ行きましょうか。」

妖精の輪のある空き地では、月が奇妙な影を投げかけていました。空き地のふちに立って熱心に耳を澄ます二人には、森が百もの声で語りかけてくるように思えました。

「よろしければ手を握っていただけないかしら。」女の子が囁き声で言いました。

男の子は白い裸足の足元に花束を落とし、暗闇の中で女の子の手を探りました。その男の子の手の中に、すぐさまぬくもりのあるものがすべり込んできました。それは興奮のために少し震えていました。「恐いんじゃないわよ。」女の子は言い、そして二人は待ちました。

* * * * *

白樺の木々の間から、一人の男がとつぜん飛び出しました。男は背中にナップサックを背負い、髪は浮浪者のように長く伸ばしていました。

男に目を向けられて、女の子はもう少しで叫び声をあげそうになり、男の子とつないでいる手を震わせました。男の子は思わずその手をきつく握りしめました。

「なにが欲しいの？」男の子がかすれ声でもごもご言いました。

男は子供たちに負けず劣らず驚いていました。

「いったいここでなにをしているんだね？」男は大きな声で言いました。

男の声が穏やかで安心できるものだったので、女の子がすぐさま答えました。

「わたしは妖精を探しにきたの。」

「ああ、なるほどね。」男は言いました。「そしてきみは、」男は男の子のほうに目を向けました。

「きみも妖精探しかね？ おやおや、花を摘んでしまったね。売っぱらおうってのかい？」男の子はかぶりを振りました。

「ぼくの妹に、」男の子は言いかけて不意に口をつぐみました。

「きみの妹は花が好きなのかね？」「はい。妹は死んでいるので。」男は真面目くさった顔で男の子を眺めました。「そいつは名句だな。」男は言いました。

「名句には魔力があるのだよ。死者が花を好むと誰がきみに教えたのかね？」

「死んだ人はいつもお花を持っているもの。」男の子は言い、自分の気取った考えを恥じて顔を赤らめました。

「それで、あなたは一つ、なにを一つ、探しているのですか？」女の子が遮りました。

男はしかめっ面をするふりをし、まるで立ち聞きをおそれるかのように空き地をさっと見回しました。

「夢だよ。」男はそっけなく言いました。

女の子はその答えについてしばらくじっと考え込みました。「そのナップサックはなあに？」女の子は切り出しました。

「うむ。」男は言いました。「そいつが詰まっているのさ。」

子供たちは興味津々でナップサックを眺めました。女の子の指がナップサックの紐をほどきたくてうずうずしました。

「それはどんなかんじのもの？」女の子が尋ねました。男は小さな笑い声をたてました。

「きみの夢にも、そっちのぼくの夢にもとてもよく似ている、とぼくは思うね。きみが大きくなり、立派な娘さんになったとき、本当の夢というのはたった一つだけ、分別のある者のためだけにあるのだということを知るだろうよ。けれど、ぼくの困り事を聞きたがるのはもうよしてくれ。きみには分かりっこないことさ！」男はポケットに手をつっ込んでフラジオレット^{*2}を引っ張り出し、唇に当てました。「お聞き！」男は言いました。

女の子は、笛の筒から小さなメロディーが飛び出すのが見えるようにおもいました。それは本当の妖精のように妖精の輪のまわりをくるくる踊り、そこに木霊も加わって、木々の間を軽やかに跳ねまわるのでした。

男の子はぽかんと口を開け、なんにも言いませんでした。

とうとう妖精がよろめき出し、木霊がすっかり息を切らしたので、男はフラジオレットを唇から離しました。

「やれやれた。」男は微笑みながら言いました。

「ありがとうございました。」女の子はお行儀良く言いました。「とっても素敵でしたわ。ちょっと、あなた！」女の子は男の子の手を振りほどきました。「手が痛いじゃない！」

男の子は目をおかしな風に光らせ、うろたえて両手を振りました。

「月明かりの中ではみんな死んじゃうんだ！」男の子は叫びました。「草がすっかり濡れているのはそのせいなんだ。」

女の子は驚いて男の子のほうに向き直りました。「まあ、あなた、声が治ったのね。」

「そういうことなら、」男はフラジオレットをポケットに戻しながら真面目くさって言いました。

「ナップサックの中身をきみらに見せてあげてもいいだろう。」男がナップサックの紐を解くのを、女の子は熱心にのぞき込みました。けれど中身を見ると、がっかりした声をあげました。

「絵だあ！」女の子は言いました。「絵だ。」男は淡々とくり返しました――。

「夢の絵さ。きみがこれをどう見るかは知らないがね。おそらく月は一番良く見えるように尽くしてくれるだろうが。」

女の子は絵を丁寧に眺めては、男の子に一枚一枚手渡していきました。やがて女の子は気がつきました。

「まあ、あなた！」女の子は叫びました。「その涙で絵をだめにしてしまうじゃないの。」

「ごめんなさい。」男の子はかすれ声で言いました。「止まらないの。」

「分かっている。」男は素早く言いました。「気にしないでいい。きみは前にもこれらの絵を見たことがあるんだね。」

「ぜんぶ知ってる。」男の子は言いました。「見たことはないけど。」

男は眉をひそめました。「悪魔じみてるな。」男は呟きました。

「子供が話す言葉ってのは。」男は、男の子の涙を困ったように眺めている女の子のほうに不意に向き直りました。「ベッドに入っておねんねする時間だよ。」男は言いました。「今夜は妖精は出てこないよ。妖精には寒すぎるからね。」

女の子はあくびをしました。「妖精が出てくるまでずうっと待っていたりしたら、戻ったとき叱られちゃうわね。かまわなくてよ。」

「月が弱まったよ。」不意に男の子が言いました。「もうどんな影もできないよ。」

「森の外まで送っていこう。」男は言いました。「そこでおやすみだ。」

男はナップサックに絵をしまい、それから三人はざわめく森の中を黙って歩いていきました。

(一部抜粋)

*1 ニッカーボッカー……ズボンの一種。長さが膝下までで、すそが括られた短ズボン。

*2 フラジオレット……17-18世紀に広く用いられた、リコーダーに似た高音のエア・リード楽器。